

【 5 】

氏 名 (本 籍)	お 大 ち ず こ	田 千 鶴 子 (兵庫県)
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士	
学 位 記 番 号	博 甲 第 80 号	
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 56 年 3 月 25 日	
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当	
審 査 研 究 科	心 身 障 害 学 研 究 科 心 身 障 害 学 専 攻	
学 位 論 文 題 目	自 閉 症 児 の 推 理 機 能 に 関 す る 研 究	
主 査	筑波大学教授	医学博士 齊 藤 義 夫
副 査	筑波大学教授	医学博士 長 畑 正 道
副 査	筑波大学教授	医学博士 藤 田 紀 盛
副 査	筑波大学助教授	教育学博士 小 林 重 雄
副 査	筑波大学助教授	杉 原 一 昭

論 文 の 要 旨

本論文は、自閉症児の概念学習障害の一要因としての推理機能の特性を実験的に検討したものである。それらの結果は、自閉症研究の新側面を開拓したばかりでなく、これからの治療教育の方向性を示唆した。

研究の目的

自閉症児が顕著に示す機械的学習から概念的学習への移行の困難性は、推理機能の障害に起因すると仮定された。そして、自閉症児における推理機能の発達過程と障害の特性を究明することにより、彼らの示す困難性の特徴を明らかにすると同時に、合理的な治療教育の構成にあたっての資料とすることを目的とした。

研究の方法と結果

第1実験系列では、思考活動において重要な意味をもつ視覚的なanalogical reasoningに関する機能が検討された。その結果、検討を要する問題を解決するため、第2、第3実験系列が構成された。

第1実験系列では、視覚的なanalogical reasoningの代表的な課題であるマトリックス課題(2×2)を用いて、自閉症児の発達過程を同MAの一般児と比較した。

第1実験一色・形・大きさ・方向という次元の図形の推理では、MA4、5、6歳の自閉症児の遂行レベルは、同MAの一般児と差が認められなかった。

第2実験—時系列，クラス分類，量の多少という次元の図形の推理では，MA 4，5歳で一般児と有意差が認められた。

したがって，第1，2実験における次元の差が，自閉症児の推理機能を困難にする要因と考えられた。第1の要因として，自閉症児が不定形な図形を言語化することが少ないこと，および一般児より豊富な語いをもつにもかかわらず，推理課題では得点差が認められないことより，課題解決に所有の言語を有効に使用できないのではないかと考えられた。

第2実験系列では，分類課題における刺激言語化の効果が検討された。

第3実験—言語と非言語的行動の一致が検討された。色・形という次元の分類課題において，一般児ではMA 3—4歳で言語化した事物と分類した事物が一致するが，同MAの自閉症児では，両者の一致度が低く，言語が行動を調節する手段として使われていないと考えられた。また，2次元課題になるとすべての自閉症児が困難を示し，適切な次元を選択することに障害があるのではないかと考えられた。

第4実験—適切次元の選択機能が検討された。色か形かどちらかを適切次元として選択すれば，18枚のカードが正しく分類できる実験事態で，MA 4歳の自閉症児は一般児と異なり正答を得ることが困難であった。しかし，適切次元を言語化しやすいように援助すると，一群の自閉症児は課題解決が促進された。これらのことから，言語化が次元選択の役目のみをもつのか，あるいは，言語の本質的な特徴である「抽象的にまとめる」機能をもつのかが問題となった。

第5実験—具体物図形の絵カードを機能的関係により分類する課題で，言語で「抽象的にまとめる」という機能を検討した。MA 6歳の自閉症児もMA 4歳の一般児も，理由づけという言語活動によって，得点が上昇する群としない群に分かれた。しかし，両群の差異は，上昇しない群が理由づけの教示を受けた際に顕著となった。つまり，一般児は教示効果を示し，言語媒介欠如期にあると考えられたが，自閉症児は教示効果を示さずその期に達していないと考えられた。

第3実験系列では，第1実験系列において生じた第2の要因として，刺激図形の検討がなされた。

第6実験—分類基準を推理する際の次元の偏好性が検討された。色・形・数という次元を抽出する場合，MA 4歳の一般児とMA 6歳の自閉症児は色次元がもっとも抽出しやすかった。また，自閉症児は一般児と異なり次元数が増すにしたがって，解決を容易にする傾向があった。

第7実験—色次元の問題と次元数の差が，推理課題にどのような影響を及ぼすかが検討された。無彩色の幾何学図形で次元数が2から4まで変化する課題において，自閉症児の遂行レベルは同MA (6，7歳)の一般児と差が認められなかった。また，次元数が変化しても遂行レベルに差は認められなかった。これは，提示された刺激の必要なものと不必要なものを選択することなく，無制限に取り入れているというOver-generalizationと類似した効率の悪い情報処理を行なっているのではないかと考えられた。また，この現象は，自閉症児の特徴として指摘されているOver-selectivityと矛盾するものであった。

第8実験—第1実験系列の2つの実験におけるcodingシステムの差が属性を通じて検討された。両者には，図形内で有効な値をもつ属性がすべて存在するseparable attribute (S.A.)と，有効な

価をもたない属性をもつintegral attribute (I. A.)があり、これら2種の属性による推理機能の差が検討された。その結果、S. A. では同MAの一般児(5, 6歳)と差が認められず、I. A. では有意差が認められた。I. A. では有効でない価も取り入れているため、多くの属性から基準をみつけ出し、有効な価を選択しなければならない。その際、基準なしに属性を無制限に取り入れているほど、彼らは混乱し、解決を困難にしていると考えられた。

摘要と結論

自閉症児の推理機能が知覚的な操作レベルに止まっており、そのレベルでの課題については、同MAの一般児と差は認められなかった。しかし、クラス分類、時系列、量の多少というレベルでの推理機能は明らかに遅滞していることが示された。

その遅滞の要因として、一般児では課題解決に有効に作用するとされている言語化が、自閉症児では言語化の傾向が少ないこと、また、たとえ、言語化しても課題解決にかならずしも結びつかないことが明らかとされた。そして、視覚刺激の取り入れ方においても、多数の刺激についての分類基準が形成困難なため、刺激取捨の機能が有効に働かないことが立証された。

審 査 の 要 旨

本論文は、治療的指導の成果が上り普通学級での学習が可能となった自閉症児において共通的問題となっている概念学習の困難性に着目し、とくに、中心課題である推理機能の障害をとりあげその実体を実験的に明らかにし、治療教育の進め方に新しい方向を見出そうとした研究である。

推理機能の研究には先づ、マトリックス課題により、自閉症児の示す一般的特性をおさえることに成功した。そして、第2実験系列で言語のかかわり、第3実験系列で刺激図形のかかわりを明らかにした。

自閉症児の推理機能の障害が、言語の機能的使用および視覚刺激のとり入れ方の困難性から、直観的な操作レベルにとどまっていることに依ることを明らかにした。これは自閉症児の概念学習障害の系統的な解明に向けて重要な新知見を提供したものと見てよい。

本論文の知見を実際の治療教育実践に応用するには、なお解明しなければならない課題が残されているが、自閉症児の言語・認知障害説のモデルを用い、精密で系統的な実験の積みあげの結果得られた本研究の成果は高く評価される。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。